

THE
HOSHINA
ACADEMY
Chamber Orchestra
"Ensemble=Harmonia"

ごあいさつ

本日はお忙しい中、保科アカデミー室内管弦楽団演奏会に御来場頂き、誠に有難うございます。昨年は第5回を記念しまして、音楽総監督保科洋先生にメインを指揮して頂き、かつ先生のお膝元である、兵庫県東条町でも演奏会を行いました。幸いにも大勢の方々にご来場頂き、暖かい拍手と励ましを頂戴し、メンバー一同厚く感謝しております。今年4月に当団専用練習場『響塾洋楽堂』が完成し、保科先生ご夫妻はじめ、来賓の方をお招きして盛大に落成式を行いました。古い民家を自分達で改造したもので、音響的にも設備的にはまだまだ不十分ではありますが、アマチュアオケ活動にとっての大きな問題点である練習場確保の点ではずいぶん楽になり、練習に集中できるようになりました。

今年は備前市、久世町、倉敷市と県内3カ所で演奏させて頂きます。備前公演では、木村病院院長・木村穂積先生にひとかたならぬご支援を賜っております。思い起こせば7年前に当団がはじめて自主公演を行ったのが、この備前市市民センターでの木村病院開設15周年記念演奏会でした。また新日本フィル・チェロ奏者の山崎泉氏のご尽力により、当団初の県北公演が実現いたしました。山崎氏は岡山大学交響楽団チェロトレーナーもありますし、久世町ご出身ということで、現在はエスパスホールのアドバイザーも勤められております。音響効果の素晴らしいホールで演奏できますことを大変楽しみにしております。

今回は、ソリストお二人に『英雄』という贅沢なベートーヴェン・プログラムです。『ロマンス』はなかなか演奏会では取り上げにくい曲ですが、当団にふさわしい曲だと思っています。鶴野さんの技巧的なソロは、昨年のチャイコフスキーで堪能頂いたと思いますが、今回は一音一音まで神経の行き届いた美しい音、かつ保科理論を駆使した歌心あふれる独奏でこの佳曲をお楽しみ下さい。『ピアノ協奏曲』では、ショパンコンクール入賞の輝かしい実績を誇る、現代日本を代表する若手人気ピアニストの有森氏と共に演じます。岡山ご出身の氏と、岡山大学を母体とする当団が、県下3カ所で共演するのは大変意義深いと感じておりますし、個人的には永年の夢が実現して非常に感激しております。『英雄』は<アカデミー・ベートーヴェンチクルス>第3弾です。ほぼ初演当時の編成、ヴァイオリンも対向配置で演奏いたします。ハイドン、モーツアルト、そしてベートーヴェンの第1、第2交響曲しか知らない人が、初めてこの曲を聴いた時の衝撃は、いかほどだったでしょうか。この曲の新鮮さ、革新性が再認識して頂けたらと思います。

忙しい社会人が中心のため、月に一度の練習だけでは、なかなか理想通りにはいきませんが、逆にその分集中し、『保科理論』という音楽文法を最大限に利用し、理論的に能率よく練習するという方針を守ろうと思います。運営方法、選曲内容、演奏解釈、練習形態、練習時間などのあらゆる点でこのオケは極めて個性的なアマチュア音楽団体であると自覚していますが、こうして広く皆様に演奏を聴いて頂き、御批判を仰ぐことにより、閉鎖的、自己満足的な団体に留まらないようにしたいと思います。そして岡山大学交響楽団のOBとして、また快く名前の使用をお許し頂いた恩師保科洋先生の名に恥じないような解釈・演奏を目指したいと思います。

最後になりましたが、今回の演奏会開催にあたりまして多くの方々にご協力頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。引き続き今後ともよろしく御指導御鞭撻を賜りますようお願い致します。

それでは最後までどうぞごゆっくりお楽しみ下さい。

保科アカデミー室内管弦楽団
“アンサンブル=ハルモニア”

主宰 秋山 隆

<木村病院サマーコンサート2002>

8/18 [日] 備前市市民センター

<久世町特別公演>

9/14 [土] 久世エスパスホール

<第6回定期演奏会>

9/15 [日] 倉敷市芸文館

プログラム

=ベートーヴェンの夕べ=

Lutwig van Beethoven
(1770 -- 1827)

Lutwig van Beethoven / Romanze für Violine mit Begleitung des Orchesters F-dur op.50
☆独奏ヴァイオリンと管弦楽のための『ロマンス』へ長調 作品50

ヴァイオリン独奏：鷺野 亜紀

Lutwig van Beethoven / Klavierkonzert Nr.1 C-dur op.15
☆ピアノ協奏曲 第1番 ハ長調 作品15

第1楽章	Allegro con brio
第2楽章	Largo
第3楽章	Rondo; Allegro

ピアノ独奏：有森 博

< 休憩 >

Lutwig van Beethoven / Symphonie Nr.3 Es-dur op.55 ≫EROICA≪
☆交響曲第3番 変ホ長調 作品55 ≪英雄≫*

第1楽章	Allegro con brio
第2楽章	Marcia funebre; Adagio assai
第3楽章	Scherzo; Allegro vivace
第4楽章	Finale; Allegro molto

コンサートマスター：林 峰栄・鷺野 亜紀*

指揮：秋山 隆

管弦楽：保科アカデミー室内管弦楽団 “アンサンブル＝ハルモニア”

曲目解説

ぼくがここでまず申し上げておきたいと思うのは、あの高名な、もう私たちが誰でもみな知りすぎるくらい知っていると信じている音楽家についてではありません。——むしろ、それとは違った別の人について言いたいのです。そうではなくて他にベートーヴェンについて何を言うべきことがありますよう！

ベートーヴェンといえば、狂暴で、子どもじみた理想主義者であり、この現実的な生きた世界について何一つ知識らしいものもわきまえず、ただ闇雲に自分のとてつもない本能のままにふるまった人——これが後世に伝えられた彼の人生像であり、今日に至るまでほとんどあらゆる伝記の中に多彩絢爛をきわめたヴァリエーションとなって反復し説かれているものです。

ところでみなさん、こんな言葉を聞いたことはありませんか？——「バッハは小川 (Bach) ではなく大海 (Meer) だ」
そうです、これはベートーヴェンの名言として有名ですよね。彼はこの言葉をどんな感じで述べたのでしょうか。ち
ょっと想像してみてください——　　はい、想像できましたか？残念ですが、おそらくその想像は間違っています。
では正解をご覧に入れる前に、いくつか彼に関するエピソードを紹介いたします。

自作のヴァイオリン協奏曲の譜面に、彼は献辞をこう記しました。——「ウィーン劇場の首席ヴァイオリンで宮廷劇場監督であるクレメントのために、クレメンツァ(お情け)をもって、L.v.ベートーヴェン作曲す。1806年」

弟に宛てられたある手紙(1823年9月8日付)にはこんなことも書いています。——「今日は2人の歌手が訪ねてきたんだが、彼女たちはどうしても私の手にキスさせてほしいと言うんだ。2人はなかなかの美人でね、そこで私はこう言ってやったのさ、手なんかじゃなくて口にキスしてくださいよ、とネ」(註…その後彼女たちは「第九」初演においてそれぞれソプラノとアルトのソロを担当したのでした)

親友のヴァイオリニストがロシアへ演奏旅行に出かけた時のことです。そのヴァイオリニストは、出かける前まではスマートだったのですが、8年ぶりに戻ってきたときにはかなり体型が変わっていたそうです。それを聞きつけたベートーヴェンは、早速、再会しようという由の手紙を記し、カノンを1曲添えて送りました。カノンの題名は——《でぶつちょちゃん、お顔を見せて！》でした。——ちなみに、曲名にそのユーモアが満ちあふれた作品として《なくした小銭への怒り》という作品が挙げられることもありますが、残念ながらこれは他の人がつけたということです。

ここまで読まれてみてどうですか？ベートーヴェンに対するイメージは少しでも変わったでしょうか？ではもう一度想像してみてください——「バッハは小川 (Bach) ではなく大海 (Meer) だ」と言っている時のベートーヴェンの表情を…　そうです！　そうです！　駄洒落好きのお茶目なオッサンの顔です！——もっともこれは確かめたわけではなく、ぼくが勝手にそう思っているだけなのですが、あなた、どう思いますか？

ともかく、このように、ベートーヴェンはことユーモアにかけて決して不案内だったわけではないのですが、それを社交の場で表に出すことのできない、ある不幸な理由がありました。それは——耳の疾患。それが何を意味するか真に理解できる人が果たしてこの世にいるでしょうか？　とはいえ、たとえ理解できないにしても、理解しようと努めることにいくばくかの意味もあるのではないかと考え、筆をすすめることにいたします。

ベートーヴェンは、1802年10月6日と10日の日付をもつ2通の封書の中で、2人の弟に宛てて次のように述べています。——「おお、お前たち、——私を厭わしい禎迷な、または厭人的な人間だと思い込んで他人にもそんなふうにいいふらす人々よ、お前たちが私に対するそのやり方は何と不正当なことか！　お前たちにそんな思い違いをさせるこの隠れた本当の原因をお前たちは悟らないのだ。……他の人々にとってよりも私には一層完全なものでなければならない一つの感覚(聴覚)、かつては申し分のない完全さで私が所有していた感覚、たしかにかつては、私と同じ専門の人々でもほとんど持たないほどの完全さで私が所有していたその感覚の弱点を人々の前へ曝け出しに行くことがどうして私にできようか！——何としてもそれはできない！——それ故に、私がお前たちの仲間入りをしたいのにしかもわざと孤独に生活するのをお前たちが見ても、私を赦してくれ！　私はこの不幸の真相を人々から誤解されるようにして置くよりほか仕方がないために、この不幸は私には二重につらいのだ。人々の集まりの中へ交じって元気づいたり、精妙な話を楽しんだり、話し合って互いに感情を流露させたりすることが私には許されないのである。……」(片山敏彦氏訳)

すでにお気づきの方もおられるでしょう。これが世に言う「ハイリゲンシュタットの遺書」(の一部)です。実に涙なくしては読むことができません。当時は勿論のこと、現在多くの人びとが抱いているベートーヴェンに対するイメージは、実のところ彼が自らに被せた(あるいはそうせざるを得なかった)〈ペルソナ〉に他ならなかったのです。

ところで、時期的には交響曲第2番と第3番『英雄』との間に書かれたこの「ハイリゲンシュタットの遺書」(以下「遺書」と記す)は、通説では、自殺にまで思い至るほどの危機を克服した証言としてそれを解釈することによって、その後のベートーヴェンの音楽における劇的構成(「闘争から勝利へ」)を理解するための鍵とされてきました。すなわち、「遺書」を書くことによって彼は過去の人生に潔く別れを告げ、心機一転、第二の人生へと踏み出した——真に偉大なベートーヴェンはこの時に誕生した、と言うのです。

しかしほくは、この「遺書」を何度も読むうちに、そうした考え方方に疑問を持つようになりました。「遺書」からの引用を続けます。——「……私はほとんどまったく希望を喪った。みずから自分の生命を絶つまでにはほんの少しのところであった。——私を引き留めたものはただ〈芸術〉である。自分が使命を自覚している仕事を仕遂げないでこの世を見捨ててはならないように想われたのだ。……芸術の天才を十分展開するだけの機会をまだ私が持たぬうちに死が来るとすれば、たとえ私の運命があまり苛酷であるにもせよ、死は速く来過ぎるといわねばならない。今少しおそく来る

曲目解説

ことを私は望むだろう。——しかしそれでも私は満足する。死は私を果てしの無い苦悩の状態から解放してくれるではないか？——来たいときに何時でも来るがいい。私は敢然と汝(死)を迎えよう。……」

これが、自殺の意図をもって書かれた文章だと思いますか？ここからは、たとえ彼がかつて自殺しようと考えたことがあったとしてもそれはすでに克服されていた、ということが読み取れます。したがってこの「遺書」は、自殺とは別の、ある死の予感(直感)によって書かれたものだと、ぼくは言わざるを得ない。通説では「ベートーヴェンに(第2番から奇跡的な飛躍を遂げた)『英雄』のような作品を書かせた第一の要因は、ハイリゲンシュタットにおける自己克服である」となっているが、むしろ話は逆で、ベートーヴェンは『英雄』をはじめとする傑作を書かずには死にきれないという理由で自殺しなかったのです。そして忘れてならないのは、この時、死は彼を苦悩から解放してはくれなかつたということです。「遺書」を書いた後なおベートーヴェンは25年もの間苦しみ続け、生きながらえなければならなかつたのです。何という悲劇！！！

しかし悲劇は、その悲劇性が過度に増し過ぎるとそれは喜劇に転じます。そのことを彼はまたよく知っていました。1827年3月、死の床にあったベートーヴェンは、古典ローマ喜劇の終幕の常套句で精一杯のユーモアを込めてこう語ったということです。——「喝采せよ、友よ、喜劇は終った」

肝腎の曲目解説がまだでしたね。ではごく簡単に…

☆『ロマンス』へ長調

(演奏時間約9分)

ロマンスとは、その名称からも理解されるように、ロマンティックでデリケートな性格を特色とした抒情的な器楽曲のことです。ベートーヴェンはその生涯に、ヴァイオリンとオーケストラのためのロマンスを2曲残しています。その2曲ともに言えることですが、ベートーヴェンは、ヴァイオリンのいわゆるアクロバティックなテクニックの開陳にはほとんど目を向けてずに、この楽器の最もナチュラルで本来的な持ち味と言える、歌う特性を最大限に生かそうとしたようです。みずみずしく清冽な音色を持つ並紀さんにピッタリの曲だと思います。

☆ピアノ協奏曲第一番 ハ長調

(演奏時間約35分)

「あの若者の中には悪魔が住みついている。私はこのような演奏を聴いたことがない！私が与えた主題を即興してみせた彼の演奏は、それはあのモーツアルトからさえ聴いたことがない程のものだった。それから彼は自作の曲を披露したのだが、それはもう、本当に、筆舌に尽くしがたいものであった。それは、私たちがいまだかつて想像だにしなかつた程の離れ技だったので。——同時代のウィーンの作曲家 ヨーゼフ・ゲリネック」(山本浩之訳)

ベートーヴェンはまずピアノ演奏のヴィルトオーゾとして名を上げました。その頃のウィーンでは、モーツアルトの演奏に代表されるような、音の均質さ、響きの清澄さ、軽快なタッチといった、伝統的なチェンバロ奏法からくる真珠を転がすようなスタッカート気味の奏法が流行していました。しかしベートーヴェンは、彼独自の2つの武器でウィーンの音楽界を席捲したのです。それは、1つは、かつてオルガン奏者として身につけた即興術であり、もう1つは、クラヴィコード奏法に由来するレガート奏法ないしはカンタービレ奏法でした。事実、彼は後年、弟子の(あの!) チエルニーに「モーツアルトの演奏は見事であったが、ポツポツと音を刻むようでレガートではなかった」と批判的に述べています。さあ、今日の有森さんはどんな奏法を披露してくれるのでしょうか、僕も楽しみです。

☆交響曲第3番変ホ長調『英雄』

(演奏時間約50分)

ある時、友人の一人がベートーヴェンに尋ねました。——「今まで作曲した交響曲のうちでどれが一番気に入ってるの？」「それは何と言っても『英雄』だよ」「あ、そう、ぼくはまたてっきり第5番(運命)の方だろうと思ったんだけどね」「いいや、断然『英雄』だ」

もっともこの問答は「第九」が作曲される以前のことなので、「第九」と比べてどうだったかは分かりません。——ちなみに「第九」に対する彼の評価は必ずしも高すぎることなく、『ミサ・ソレムニス』と「第九」の出版交渉に際して自らつけた価格は、ミサが1,000 フローリン、「第九」が600 フローリンというものでしたから、あるいは……。

しかしこの曲は当初、聴衆の受けが大変に悪かった。その原因は、主としてその長さです。聴衆は曲の長さにいらいらし、「人間の忍耐力の限界を超えてる。1時間とはいくらなんでも長すぎる！」と言い、中には「もういいかげんにしてやめてくれ。やめてくれたらもう1クロイツァー払うから…」と言う者さえありました。ところが、それを聞いたベートーヴェンがつぶやいた言葉がまた傑作なんです。——「短すぎる気がする…」(ご立派!!)

ですからみなさんも、あるいはストリップの客が先をせかす時のような気持ちでこの曲を聴くのではなく、しっかり覚悟を決めて(?)、ごゆっくりとお楽しみくださいね。

文責：山本 浩之 (やまもと ひろゆき・ヴィオラ)

正 義 の 音

西 欣也

あなたはなぜ、「英雄」の終楽章に付された奇妙に華々しいフィナーレを聴くのが嫌だからといって、今度の演奏会に足を運ぼうとなさらないのですか。演奏会場では、いつもあなたがなさっているように、最終部のプレストにさしかかった途端、トップ・ボタンを押して満足げにCDをしまい込んでしまうことはできないにしても、ベートーヴェンは、勝ち誇ったように盛大なフィナーレで意気揚々と曲を締めくくることで、統領ナポレオンに敬意を表したに過ぎないわけですから、あの部分を一種の短いパロディとしてお聴きになれば、それですむ話ではないのでしょうか。

まあ、あなたのおっしゃるように、ベートーヴェンは、ナポレオンの皇帝即位に失望したとき、タイトルと献辞を差し替えるといった小手先の変更に終わらずに、いっそ曲そのものに修正を加えるべきだったのかかもしれません。特に、タイトルの変更が不適切だったという点については、私も大いに賛成です。もし、ベートーヴェンが本当に、ナポレオン個人を崇拝していたのではなく、ナポレオンが体現していた理念の方に共鳴していたのだとしたら、英雄の想い出などには固執せずに、「共和制」交響曲とか、「反貴族的」交響曲とか、「解放のための」交響曲とか、他にいくらでも名前の付け方はあったはずです。そんな名前を授かっていたら、第三交響曲は、私たちにとって、現在とはどれほど違った存在になっていたことでしょう！そもそも、冒頭の颯爽とした旋律を耳にすると、早速、白い馬にまたがった若者が勇ましくサーベルを振りかざし、速やかに兵卒を率いながら猛然と戦野へ向かうような光景が、ほとんど条件反射的に脳裏をかすめてしまうことは、何という皮肉でしょうか。この貧しく紋切り型に過ぎない英雄のイメージは、多分、ダヴィッドの描いた「サン=ベルナルド峠を越えるボナパルト」か何かに由来しているのでしょうが、この画家こそ、作曲家に豊かなインスピレーションを与えたヨーロッパの解放者ナポレオンのためになく、第一共和制を踏みにじった専制君主としてベートーヴェンが罵った皇帝ナポレオン一世のために、宮廷主席画家の職務として肖像画を描いていた男なのですから。「英雄」などという愛称でこの曲を呼び続けるうちに、わたしたちは、アングルやダヴィッドのようなお抱え画家たちが皇帝の姿をそらぞらしいほどの気品と共に描出したのと同じ仕方で、ナポレオン個人を美化してしまい、ベートーヴェンを永久に悔しがらせることになりますかねません。

こういう話になるとあなたは、歴史も政治も逸話も伝説もどうでもよろしい、音楽家は優れた音楽を創出すればそれでよいはずだ、とおっしゃるかもしれません。しかし、どうでしょう。ベートーヴェンがいかに緊密な音のユニヴァースを創り上げたとは言っても、彼もまた一定の歴史的条件の下で生きたのです。恐ろしく堅牢な第三交響曲でさえ、例の、とて付けた凱歌のようなフィナーレや、パリの野外で耳にしそうな木管アンサンブルや、軍隊式典につきものの葬送マーチを、英雄への感激の名残として含んでいるではないですか。この事実こそは、音楽構造の世界と歴史的エピソードとが少しも矛盾せずに、一つの楽曲の中に融合していられるということを象徴しているように、私には思われます。そしてまさしくこの理由から、私は、献辞を取り消す際この曲からナポレオンの影がすっかり取り去られるべきだったというあなたの意見に、首をかしげざるをえません。解放者ナポレオンのイメージによって喚起されたインスピレーションだけをこの曲から除去することはできないことを、ベートーヴェン自身、はっきりと理解していたのではないですか。

こんなお説教じみたことをお話ししてまでもあなたをお誘いするのは、今度の演奏会に私はそれなりの覚悟をもって挑んでいるからなのです。実は私は、もし仮にベートーヴェンが、様々な伝説が伝えるほどに批判的・政治的人間でなかったとしても、彼が現実に為したほどの創造活動を為していたか否かという、昔から持ち続けた問題に対して、今回のベートーヴェン・プログラムを聴きながら曲がりなりにも一つの結論を出そうと、私の貧しい想像力を励ましているところなのです。現役学生の頃から、ナポレオン戴冠の知らせに憤ったベートーヴェンがスコアの表紙を破り捨てたという逸話を聞く度に、私は、怪しげな逸話だとは思いながらも同時に、例えば現代日本において、戦後の民主化の過程に胸躍らせて作品を構想しながら、占

領軍の「逆コース」や昭和天皇不退位の知らせに憤慨して献辞を変更しうるようなタイプの芸術家がいたるうかと、真剣に反省してみないわけにはいきませんでした。日本にこだわらずとも、ベートーヴェンがナポレオン・ボナパルトに捧げたほどの真摯な政治的情熱に裏打ちされた音楽作品が、二十世紀においては、レーニンについても、ホーナー＝ミンについても制作されなかったことは、やはり私を考え込ませます。いや、そうした作品も腐るほど書かれたはずだと、あなたは勿論お笑いになるでしょう。単にそのどれも、ベートーヴェンの足元にも及ばない愚作だったのだ、つまり優れた作品あって初めて、政治的神話が生まれるのであって、反対に高邁な政治的理念が優れた芸術作品を生むのではないことは、社会主義リアリズム芸術やプロレタリア芸術をベートーヴェンの偉業と比較すれば一目瞭然ではないか、そんなふうに論そうとなさるあなたの声が聞こえてきそうな気さえします。それは、そのとおりでしょう。いくら私でも、社会的解放を支持しさえすればベートーヴェンのような偉大な芸術家になれるといったバカげた主張をしたいわけではありません。ただ、その逆も真だと言えるでしょうか。つい先日も私は「英雄」のCDを聴いたのですが、確信に満ちた主題が数式のように精確な配慮で全体を構成してゆくのを聴いているうちに、例の問題がムクムクと頭の中に思考実験を展開し始め、「ああ、もし音楽に自己欺瞞というものがあるとしたら、この音楽ほどそれにほど遠いものはないに違いない、これほど篤実で自信にあふれた芸術家が二十世紀に生きていたとして、彼の義心を芸術にだけでなく社会にも同等に振り向け、「民族自決」や「核廃絶」を、ただその正当性のゆえに支持しないはずがあろうか」といった思索へと、私を強く導き始めたのでした。耳の悪いベートーヴェンが大声でまくし立てる政治論で知人たちをうるさがらせていたという有名なエピソードがありますが、そんな話よりも、彼の音楽そのものを通して、彼の理性や自由への確信が確かに伝わってきたことが、殊に私には重要だと感じられるのですが、いかがでしょう。そしてこのような意味でならば、耽美派のあなたとも、意見の折り合いがつけられるのではないかでしょうか。あなたが、私の未成熟な政治的意見を嘲笑することに終始せず、演奏会場でベートーヴェンを聴きながら、私のとなりで深く考えてみて下さることを望まずにはいられません。

* * *

早速のお返事、ありがとうございました。ご指摘の、「芸術家がもし仮に他の時代に生きていたら」といった仮定があまり実り多い考察を生むことがないという点については、承知しているつもりです。（プロコフィエフが「古典交響曲」を書きながら二十世紀のハイドンについて空想したことが説得力を持たない、という傍証には、納得させられました。）それに、「英雄」のみならず、その前後に書かれた「クロイツエル」や「ラズモフスキー」など、（あなたにとっては例のフィナーレを除いて！）どれも並外れて緊密な内容とエネルギーを保持していて、伝記や歴史的背景を全く必要としない優れた自律的価値を持っているというお考えにも、基本的には同意します。それにしてもあなたは、ご自分が「耽美派」などではなく、私と同様に「完全な自律世界と外部の歴史的世界とのあいだで」芸術作品をバランスよく理解しようとなさっていると主張されますが、どうも私には、そのような穩当なご意見自体、歴史的文脈への反省を欠いた、あまりに抽象的な図式に聞こえてしまいます。引き合いに出されていた吉田秀和の『ベートーヴェンを求めて』には、私なども学生時代に感銘を受けたものですが、ああいった角度から自律的作品分析に入れ込むことそのものはよいとしても、歴史的社會的文脈の中で芸術を理解する訓練を欠いている私たちのような世代にとっては、「歴史の反映」の側を意図的にもっと強調してみるのもよいのではないかというのが、私の立場なのです。いずれにしても、吉田氏は、演奏を終わり間近で切ってレコードをしまいこむことを勧めたりはしないでしょう。あなたもぜひ、コンサートにおいてになって、ベートーヴェンと新しく出会い、その後に一緒に食事でもしながら、更に詳しくお考えを聞かせて下さったり、私の思考実験の結果に忌憚ないご批判を下さったりすることを、期待しています。

（にしきんや：岡山大学交響楽団平成3年卒部・関西大学非常勤講師）

プロフィール

保科 洋（ほしな ひろし）：名誉指揮者、音楽総監督



昭和11年東京に生まれる。両国高校卒業後、昭和29年東京芸術大学作曲科に入学。昭和35年同大卒業とともに、毎日コンクール作曲部門管弦楽曲の部第一位入賞。昭和38年には、文部省芸術祭奨励賞受賞。東京音楽大学、愛知県立芸術大学を経て、昭和58年兵庫教育大学教授。平成13年3月定年退官し同大名誉教授となる。作曲・指揮の両面で活躍。

吹奏楽の作曲においては、日本を代表する一人で、海外でも評価は高い。全日本吹奏楽コンクール課題曲も過去3回委嘱されている。

作曲家としての見地から、また多くのアマチュア音楽団体の豊富な指導経験と、理論的根拠に基づく独自のユニークで説得力のある音楽解釈は、近年注目を集め高く評価されている。それらの集大成として、音楽の友社より『生きた音楽表現へのアプローチ』＝エネルギー思考に基く演奏解釈法＝（保科 洋著）として出版された。類書のない理論的音楽解釈法として、アマチュア音楽愛好家はもちろん専門家の間でも評判になっている。

主な作品に、「カタストロフィ」「古祀」「吹奏楽のためのカプリス」「愁映」「風紋」「パストラーレ」「祝典舞曲」「饗宴」「管弦楽のための変奏曲」、創作オペラ「はだしのゲン」などがある。

秋山 隆（あきやま たかし）：常任指揮者



昭和40年、岡山市に生まれる。高松中学校吹奏楽部にて奥原弘巳氏に指導を受け、当時新設の岡山一宮高校に進学。岡山県では初の、学生指揮者による吹奏楽コンクールA部門金賞受賞として注目される。

昭和59年岡山大学医学部入学と同時に岡山大学交響楽団にトランペット奏者として入部。現役時代には学生指揮者を務め、卒部後サブコンダクターとして、常任指揮者保科洋氏のアシスタントを行い今日に至る。

平成6年当団を同級生後輩らと独自に組織し、責任者兼指揮者として活動。第4回定期演奏会後、アメリカ留学（カリフォルニア大学バークレー校）に伴い、当団も活動を停止。帰国後活動再開。トランペットを鈴木勝久氏に師事。指揮法を奥原弘巳氏、保科洋氏、David Milnes 氏に師事。

平成3年医学部卒業後、病理学教室（岡田茂教授）大学院生となる。現在は、岡山大学大学院医歯学総合研究科・病態探究医学講座（旧：医学部第一病理）助手。本年10月より川崎医科大学病理学教室に転任予定。

妻は当団ヴィオラ奏者。二児（小6男、小3男）の父。

鷲野 亜紀（わしの あき）：ヴァイオリン独奏



旧姓：盛田。5歳より（故）木村善之氏にヴァイオリンを師事。

岡山一宮高校卒業後、岡山大学文学部言語学科入学と同時に岡山大学交響楽団に入部。同団コンサートマスターを務め、第38回定期演奏会ではサン=サーンス作曲『序奏とロンド=カプリチオーソ』を共演し好評を博す。

当団発足時からのコンサートマスターであるとともに、岡山交響楽団及び岡山大学OB交響楽団でもコンサートマスターを歴任し、遺憾なくその才能を發揮している。『アンサンブル=アルケミー』における室内楽の分野でも高い評価を受けている。

昨年の第5回定期演奏会においては、チャイコフスキイ作曲／組曲第4番『モーツアルティアーナ』終曲でも素晴らしい独奏を披露し、絶賛された。

当団トランペット奏者鷲野氏と結婚後、島根県に居住。一児の母。

現在、島根県立安来高校英語科教諭。同校弦楽同好会顧問。

プロフィール

有森 博（ありもり ひろし）： ピアノ独奏



1985年東京芸術大学入学、'92年同大学大学院終了。'90年第12回ショパン国際ピアノコンクールにて最優秀演奏賞を受賞。同年岡山県芸術顕賞を受賞。'92年第5回シドニー国際ピアノコンクール第4位入賞。同年9月に「奏楽堂デビューコンサート・シリーズ」に選出され、力強い演奏に高い評価を得る。1994年第10回チャイコフスキイ国際コンクールピアノ部門入賞。1995年1月小澤征爾指揮・新日本フィルにて「動物の謝肉祭」を好演。6月ニッポン放送主催<新日鉄コンサート>出演、10月<読響オーケストラハウス>出演。'96年7月九響と協演。'97年12月東京シティフィルと協演。

'96年12月より2000年3月まで6回に亘る<ラフマニノフ・ピアノ作品全曲連続演奏会>を開催。'98年2月に同シリーズ・二大協奏曲のタペを開催。3月地方オケフェス「関西フィル・東京公演」及び定期にラフマニノフで協演。'99年2月日本フィル九州公演でラフマニノフを、3月に東京シティフィル第130回定期でプロコフィエフを協演。

2000年10月に3枚目のCD<ラフマニノフ：音の絵>全曲をリリース。また同月より室内楽シリーズ<モスクワからの伝言>（全五回）をスタートさせ、2001年7月よりプロコフィエフ：ピアノ・ソナタ全曲演奏会を三回に亘って開催。11月、小澤征爾指揮・新日本フィル・定期演奏会にラフマニノフを協演。超人の技巧を披露する。

ソロリサイタル・コンチェルトでは、東欧の大作曲家の作品を主に積極的な活動を展開。野上登志子、水本雄三、小林仁、ナターリヤ・スースロワの各氏に師事する。

【写真・尾辻弥寿雄】

本日はようこそお出で下さいました。ピアノで協演させていただく有森博です。
今回、岡山大学のOBを中心のこのオーケストラとの協演ではメンバーに中学、高校の先輩、後輩などから岡山市ジュニアオーケストラでの先輩、後輩がおりまして（おられまして）同窓会に参加するような気がしてとても楽しみにしています。

そもそもそのきっかけは、数年前、岡山市ジュニアオーケストラ（ちなみに小学から高校まではパーカッションでした）との協演でアメリカ公演を行った時、本日指揮をして下さる秋山さんがちょうどアメリカに在住されていて聞きに来て下さったところからはじまるのです。その際、「これこれこういうオケをやっている」と紹介をうけ、「機会があればやりましょう」みたいなことになり、「まあ社交辞令じゃわなあ」と思っていたら、「本当にすることになってしもうた」（決して、することになって「しまった。」という意味ではない。念のため）という訳なのです。

ところで、今回県内3カ所で演奏会が行われるわけですが、オケの皆さんは本業の仕事をこなしながら休日返上で手弁当でされているのです。これはすごいパワーですよねえ。本当に好きでなくては出来ないことです。アマチュアのオーケストラとの協演の度に感じるのは、音楽とは本当に楽しいものなんだ、ということです。それを実感し、共感することで自分自身を原点に戻すことができるのです。そして演奏会に向けての意識が、とても前向きですよねえ。どうしたら、よりよくなるか、あーでもない、こーでもないと、もがきながらも着々と進んでいくのです。その「もがき」は自分を初心に返してくれます。そして演奏が終わった後の感動はそれは大きなものです。中・高時代の部活動やオーケストラで味わった感動がよみがえります。それ程純粋に音楽に集中する気持ちというのは、ともすれば忘れがちになるものです。いろんなところで考えられられます。いやはや、・・・。

とにかく今回の保科アカデミー室内管弦楽団に拍手を！！

そして演奏会の後どんな感動（飲み会？）が待っているのか楽しみでなりません。 =有森 博=

過去の演奏活動

1994/8/7 [日] サンパルホール沼隈（福山市）

チャリティーコンサートに出演

☆ベートーヴェン／交響曲第1番ハ長調第1楽章

☆モーツアルト／ピアノ協奏曲第21番 その他

1995/7/29 [土] 備前市市民センター

<木村病院開設15周年記念特別演奏会>

☆モーツアルト／歌劇『劇場支配人』序曲 K.486

☆モーツアルト／ディベルティメントニ長調 K.136

☆ベートーヴェン／交響曲第1番ハ長調

1995/8/6 [日] 倉敷市芸文館

<第1回定期演奏会>

☆モーツアルト／歌劇『劇場支配人』序曲 K.486

☆チャイコフスキイ／ロココの主題による変奏曲

チエロ独奏：山崎 泉

☆ベートーヴェン／交響曲第1番ハ長調

1995/8/14 [月] 岡山シンフォニーホール

<保科洋先生岡山大学交響楽団指揮者就任

30周年記念および還暦記念演奏会>

☆ベートーヴェン／交響曲第1番ハ長調第1楽章

(指揮：秋山 隆)

☆モーツアルト／歌劇『劇場支配人』序曲 K.486

(指揮：保科 洋)

1996/8/17 [土] 三木記念ホール（岡山市）

<第2回定期演奏会>

☆モーツアルト／歌劇『ドン・ジョバンニ』

ハイライト（編曲：秋山 隆）

☆モーツアルト／交響曲第41番ハ長調「ジュピター」

1996/8/18 [日] 西大寺ふれあいセンター（岡山市）

兵庫県城崎町民歌（保科 洋作曲）のスタジオ録音

1996/11/9 [日] 兵庫県東条町コスマックホール

『中学音楽共通鑑賞教材』&『指揮法ビデオ講座』

ビデオ収録（指揮・解説：保科 洋）

☆ベートーヴェン／交響曲第5番『運命』第1楽章

☆チャイコフスキイ／弦楽セレナード第2楽章

☆J. シュトラウス／「こうもり」序曲、その他

1997/8/16 [土] 岡山市民会館大ホール

<山本拓也氏追悼演奏会> (指揮：秋山 隆)

第1部：保科アカデミー室内管弦楽団

☆ストラヴィン斯基／組曲『ブルチネルラ』より序曲

☆水田年紀／弦楽オーケストラと2つの独奏楽器の為の

『追憶』～T. Y. に捧ぐ～（委嘱作品・初演）

☆ラヴェル／『亡き王女のためのバヴァース』

☆R. シュトラウス／『四つの最後の歌』より、

III. 眠りにつこうとして ソプラノ独唱：岡崎 順子

第4部：山本拓也『復活』オーケストラ（保科アカデミー及び

岡山大学交響楽団の現役・OBを中心とする特別編成のオーケストラ）

☆マーラー／交響曲第2番ハ短調『復活』

第1楽章 第4楽章 第5楽章より（編曲：秋山 隆）

アルト独唱：矢内 淑子 ソプラノ独唱：岡崎 順子

1997/9/17 [日] 倉敷市芸文館

<第3回定期演奏会>

☆モーツアルト／歌劇『フィガロの結婚』序曲

☆モーツアルト／ヴァイオリンとヴィオラの為の

協奏交響曲変ホ長調 K.364

ヴァイオリン独奏：松原 勝也

ヴィオラ独奏：古川原 裕仁

☆ベートーヴェン／交響曲第2番ニ長調

1998/8/23 [日] 倉敷市芸文館

<第4回定期演奏会>

☆ブームス／『ハイドンの主題』による変奏曲

☆モーツアルト／ホルン協奏曲第2番変ホ長調 K.417

ホルン独奏：杉本 賢志

☆メンデルスゾーン／交響曲第4番イ長調『イタリア』

2001/4/15 [日] 倉敷市芸文館

<活動再開記念特別演奏会>

☆テレマン／ヴィオラ協奏曲

ヴィオラ独奏：古川原 裕仁

☆バッハ／オーボエとヴァイオリンの為の協奏曲

オーボエ独奏：津上 順子

ヴァイオリン独奏：篠崎 史紀

☆モーツアルト／ヴァイオリンとヴィオラの為の

協奏交響曲変ホ長調 K.364

ヴァイオリン独奏：篠崎 史紀

ヴィオラ独奏：古川原 裕仁

2001/9/22 [土] 兵庫県東条町コスマックホール

<第5回定期演奏会記念東条町特別講演>

2001/9/23 [日] 早島町『ゆるびの舎』

<第5回記念定期演奏会>

☆J.・シュトラウス／喜歌劇『こうもり』序曲

☆保科 洋／管弦楽のための『懐想譜』（初演）

☆チャイコフスキイ／組曲第4番『モーツアルティアナ』

より終曲 ヴァイオリン独奏：鶴野亞紀

（以上指揮：秋山 隆）

☆J.・ブラームス／交響曲第3番ヘ長調

（指揮：保科 洋）

2001/11/4 [日] 岡山バプテスト教会

<バプテスト岡山宣教50周年記念式典>

☆ヘンデル／『メサイア』よりハallelヤコラス 他

『ズッケロ・マキアート』

有田 耕司 (ありた こうじ・岡山大学交響楽団 OB (Tp))

イタリアでカッフェといえばエスプレッソのこと、間違の無いようにしたければカッフェ・ノルマーレとか直截にエスプレッソといえればいい。

ちなみに日本でいうところのふつうのコーヒーを頼むときはカッフェ・アメリカーナとかカッフェ・ルンゴという。ルンゴとはロングのことですエスプレッソが背の低いカップで供されるのに対し大きなカップを使うのでこういうらしい。

私がまだエスプレッソになれていない頃、トリノのカロッツェリア・ベルトーネの近くのリストランテでの昼食のあとカッフェ・アメリカーナを頼むとカメリエーレは底にエスプレッソが申し訳なさそうに入ったマグカップと熱湯の入ったポットを持ってきた。好きなように薄めて飲めというわけだ。基本的にコーヒーをいれる道具としてはエスプレッソ・マシーンしか持っていないのだからいたしかたのないところかもしれない。

イタリアでのコーヒーの飲み方はほかにカプチーノとカッフェ・ラッテが知られている。

やはりまだエスプレッソを飲めば胃がびっくりしていた頃に、イタリア人の同僚たちと夕食に出かけて食後にカプチーノやカッフェ・ラッテを頼もうとすると、おまえは子供か？とよくたしなめられた。彼らにいわせれば大人の男は夜カプチーノなど飲むものではなく、朝飲むものだそうだ。

そんなふうに偉そうに私に教えてくれたイタリア人はコーヒーを飲むと眠れなくなるといって決して9時以降にエスプレッソに手をつけなかったのはご愛敬であったが。

カッフェ・ラッテというのはカッフェとラッテすなわちミルクを混ぜたものだが、このコーヒーとミルクの分量の割合で呼び名が変わるのでご存じだろうか？

コーヒーが多いのをカッフェ・マキアート、ミルクが多いのをラッテ・マキアートという。

マキアートというのはいわゆる“染み”とか“汚れ”的で、ミルクにコーヒーで染みをつけるからラッテ・マキアートというわけだ。

マキアートといえばイタリアのリストランテでトマト・ソースのスパゲッティを食べていてフォークでクルクルッと巻き取るときによくソースが飛んで胸元を汚すことがある。だから左手でナプキンを持って胸の前にシールドを作らねばならないのだがそれでもシールドをかいくぐってネクタイやシャツに染みをつけることがある。こんな時はカメリエーレに向かって自分の胸元を指さしながら”マキアーティ！！”と声をかけると、白い粉と洋服ブラシを持ってきてくれて、染みのところに白い粉をかけ浮き出してきたソースが乾いたところでブラシでこすって白い粉を落とすと結構染みが目立なくなっている。

さて、やっと保科先生のことなのだが、私の覚えている限りでは先生はコーヒーはお嫌いではなかった。

結構楽しみに飲んでおられたように覚えている。

でも、その飲み方が大邪道なのである。

たとえば合宿の時に、学生でうまいコーヒーをいれるのを生き甲斐にしているようなやつがいて、彼がこれ以上はないという緻密さと周到さで入れたコーヒーを先生のところに持っていくと、

「おーい、砂糖はないか！？」

砂糖を持っていくとスプーンが数え切れないくらいの回数砂糖壺とコーヒーカップの間を往復するのである。

あのコーヒーカップの底には溶けきれずに使命を全うできないまま、悔しい思いをしながら砂糖が沈殿しているのだ。

そんな砂糖湯に色が付いたような飲み物をうまいといつて先生は飲むのである。先生の味覚がいかれているとは思えない。先生に「これ、ウマイゾっ」と薦められて口にして至福の思いを味わったことはそれこそ数え切れないくらいあるのだ。

そんなわけでイタリアで暮らしあげてしばらくした頃、ヴィアレッジョのリストランテで昼食後にイタリア人の同僚にカッフェ・マキアートをすすめられてその言葉の由来を聞いたときに、あの保科先生の恐ろしい飲み物は「ズッケロ(砂糖)・マキアート」なのだと得心したことをヴィアレッジョのきれいな砂浜の風景とともに昨日のことのように覚えている。

『“かわいい後輩” 有森くん♡』

“あこがれの後輩” 有森くん♡！』

森木由美子 (もりき ゆみこ・フルート)

私と有森くんは、小、中、高、と同じ学校で学年は私の方が一つ上、つまり先輩だ。そして、私と有森くんとの本格的な出会いは中学2年のころ部活動を通してだった。

そのころの彼は私にとってとてもかわいい後輩だった。いつも自然体、というか天然○○というか、偉ぶるところがないところ、ちょっとしたことでも本当に心の底から驚いたり、面白がったりしてくれるところ、なんといっても私のようなできの悪い先輩も『先輩！先輩！』と慕ってくれるところ、そんなところが何とも言えずかわいいかった。そして何より気さくなところがよかったです。

気さくな彼は、その人柄ゆえに様々な場面で頼れる助っ人として活躍していた。同級生からは、『有！あり！』と慕われ学級委員長もやっていたし、合唱部の伴奏者もつとめていた。私も彼にはずいぶん助けてもらった。吹奏楽コンクールでもフルートパート（なんと彼は打楽器のほかにフルートまで吹けたのだ！）を手伝ってもらったり、私の入試の前には伴奏までしてもらったりしたのだから、その人柄に甘えて本当に世話になったと思う。彼のピアノ発表会で一緒に演奏（林峰栄氏も参加）させてもらったこともあったっけ。

でも、そんなかわいい後輩は、ステージ上ではいつもあこがれの後輩だった。中学、高校でグリーグ、チャイコフスキイの協奏曲をジュニアオケと共に、さまざまなコンクールで入賞の後、本当にピアニストになってしまった。今ではCDまで出して、年に何十回もコンサートを開く人気ピアニスト。ますます手の届かないあこがれの人だ。

だけど、今でもステージ出入りの際の早歩きと、にこっとしながらちょっとせっかちにお辞儀する姿を見ると「変わっていないな有森くん。」とうれしくなってしまう。演奏はもちろんこの人柄が有森くんの大きな魅力の一つだと私は思う。今回は、彼がプロになってからはじめての共演！この企画がもちあがったときから私はもうドキドキ、ワクワクだった。なんせ久しぶりに“かわいい”、“あこがれ”的後輩とまた一緒に演奏できるのだから。今日はこのめぐり合わせに感謝しつつ、思い出に残る最高の演奏にしたい。

«保科アカデミー室内管弦楽団 “アンサンブル=ハルモニア” 第6回定期演奏会に寄せて»

『ベートーヴェンと私』

吉田 健 (よしだ たけし・チェロ)

今回のプログラムは3曲ともベートーヴェン、しかも初期～中期最初期にかけてという、割と早い時期の作品ばかりである。

私はベートーヴェンの初めての出会いといえば、幼稚園の頃であろうか。4歳年上の姉の弾く「エリーゼのために」を聴いたのが最初のはずである。さぞたどたどしい音楽であったとは思うが、今もそのメロディは、はっきりと耳に残っている。

その次は小学校の音楽鑑賞の時間。「ジャ・ジャ・ジャ・ジャ～～～～ン」、そう、交響曲第五番「運命」の第一楽章である。いつ聴いたのかははっきりとは覚えていないが、このころから音楽鑑賞の時間を楽しみにしていたことだけは覚えている。

この2曲、どちらも中期の非常に充実した時期の作品で、本当に難解なはずなのであるが、心にすっと入ってくるところが不思議である。難解な証拠に、2曲とも冒頭数小節を予備知識なしに聴いて、その曲の拍子を言い当てることは至難の技である。

中学生になると、自分からクラシック音楽にのめり込んでいき、FM放送からのエアチェックで大量のクラシック音楽を浴びた。ベートーヴェンの交響曲は、高校時代にはほとんど聴いていたはずである。しかし、その中でも初期の作品というのはなかなか放送されず、今回演奏する「ロマンス第二番」と「ピアノ協奏曲第一番」は、大学を卒業して就職するまで聴いたことがなかった。

初めて聴いた初期のベートーヴェン作品は、交響曲第一番であった。正直言って、モーツアルトかハイドンか、しかしうまく、というような不可解な思いで聴いていた記憶がある。これがベートーヴェンの作品と知ったときのショックは、相当なものであった。

演奏する側では、大学2回生の時に弾いたヴァイオリン協奏曲が初体験。次の年には「運命」も弾き、やはり中期を皮切りに私のベートーヴェン演奏歴がはじまった。その後、交響曲を中心に数々のベートーヴェン作品を演奏したが、印象に残っている曲というのは意外にも初期の作品が多い。交響曲では第二番、室内楽では七重奏曲。どちらも強烈に印象に残っている。何というか、演奏するのに一切ごまかしがきかないという印象。中・後期の曲にごまかしがきくという訳ではないが、音の重ね方が薄くて単純な分、本当にきちんと弾かないときれいに響かないという怖さがあるのである。

今回のロマンスとピアノ協奏曲は、この点に細心の注意を払って演奏したいと思う。交響曲第三番は、中期の難解さに加えて室内楽の要素も併せ持つという複雑で大規模な構成を持った曲であるが、この多様性をどう表現するのかといった面でも、とても演奏しがいがある。

大学時代に同じ音楽の方向を目指したもの同士で演奏するベートーヴェン、どんな演奏になるのか。初期の作品の面白さも合わせて聴いていただき、みなさんの心に強烈に残る演奏をしたい所存であります。

『特集：山本浩之と語る』

藤原 智洋 (ふじわら ともひろ・ヴァイオリン)

藤：山本さん、今日は大学院試験の勉強の忙しい中来ていただいているありがとうございます。

山：いえいえ、藤原君も病院実習、頑張っているみたいだね。

藤：頑張ってますよ。さて、山本さんはアカデミーで演奏されて2年目ですよね。山本さん自身、この管弦楽団で演奏される事に対し、どのように思っていらっしゃいますか？

山：色々な魅力のある楽団だと思います。贅肉を削ぎ落とした弦の編成といい、プログラムの曲目といい、そして共演者がN響のコンマスの篠崎さんや、Vlaの古川原さん、今回の有森さんといい、本当に素晴らしい環境で音楽を楽しんでいられるなあと。

藤：そうですよね。集まっているメンバーが岡大オケ歴代のコンマスやトップ奏者中心で個人レベルも申し分ないし、亜紀さん（コンミス）の音の何と華やかで瑞々しいこと！さらに今年になってできた専門練習場の「響塾洋楽堂」も魅力の一つですよね。

山：そうだね。気軽に寝泊りできる練習場もなかなかないしね（笑）。所で藤原君は今年の春岡大オケを卒部して間もないけど、他の楽団で演奏する機会は何回かあったよね？

藤：はい。今までどっぷり浸かっていた「保科オケ」を客観的に考えるいい機会になりました。やはり山本さんははじめ他の団員の方が日ごろよくおしゃべっていることを実感しています。この楽団でしか表現できない音というのが確実にありますね。他のアマの楽団で、団員一人一人の音楽に対する価値観が千差万別なだけに一つのことを追求するのに時間がかかるてしまい、練習時間が長いことで妥協してしまうという場面によく遭遇しましたが、「保科理論」のもとで演奏している我々はやりたいことを全員が理解しているだけに短い時間で緻密なアンサンブルを作れているんだなと実感させられています。

山：なるほど。ところで、君にとって印象に残る演奏会というものは？

藤：もちろん血と汗と涙の結晶ともいえる岡大オケ現役4回生の最後の演奏会ですが、去年のアカデミーの第5回定期演奏会は別の意味で忘れられませんね。

山：というのは？

藤：まったく新しい世界だったんです。当時僕は岡大オケ現役生でしたが、学生オケがどうしても超えられない壁をどんどん超えていく高揚感がありました。それから現役で「伝説」と呼ばれている岡大歴代コンマス・コンミスの方との共演もできましたし。あと保科先生のなんと楽しげな指揮っぷり！学生の練習であんな表情は見たことなかったです（笑）。

山：それに亜紀さんの極上のソロ！打ち上げの前に酔っちゃうよね。僕にとってもその演奏会はとても印象深いんだけど、最近では去年札幌で聴いた有森さんのリサイタルが忘れられないかな。演奏面はもちろん素晴らしいんだけど、びっくりしたのはアンコールを6曲も披露してくれたこと！その度に聴衆も盛り上がり上がって、聴衆と演奏者が一体となるところまで行き着いて、そんな空間がとても新鮮でしたよ。

藤：へえ、すごい！今回はいったい何曲演奏していただけるんでしょうね。

山：あと君がコンマスをした去年の夏の岡大・京大合同演奏会も印象深いなあ。ちょうど甲子園で高校野球を観戦して

『保科アカデミー室内管弦楽団 “アンサンブル=ハルモニア” 第6回定期演奏会に寄せて』

いるのと似ているかな。プロの技を楽しむのもいいんだけど、たとえアマチュアでも半年間一音にこだわってきた成果を聴いてその一つ一つのプレイに一喜一憂するというのもたまらなく面白い。

藤：ありがとうございます。僕も今年OBになって現役に対して同じ感想を抱いていますよ。では最後に、山本さんが普段どのような音楽の楽しみ方をしているか聞かせてください。

山：聞く方面では、クリーヴランド・オケのようなどにかくアンサンブルにこだわった録音を聞くのが三度の飯より好きですね。

藤：そうそう。ピタリと合ったタテ（音の入り、切り、粒）、パート間の絶妙なバランス、隅々まで統一された音色のニュアンス、透き通った和声…たまらないですよね。

山：うん。あみーゴ（鈴木あみ）の歌と同じくらいたまらないね。それから演奏面では、聴衆を満足させたいと思うのはもちろん、共に共演している人も聴衆だとあってやっぱり満足させたい。ハーモニーの中に自分の音が溶け込むことを前提として、自主性をめいっぱい發揮していかないね。最近ではビブラートをいかに効果的にかけるか、研究中ですね。亞紀さんに合わせることが当面の目標なんだけど。

藤：なるほど。先程、聴衆を満足させたいということをおっしゃったんですけど、聴衆の方にも色々いらっしゃって、クラシックは初めてという人、曲の隅々まで知っているという人、と様々ですが、どの聴衆の方にも「ああ、来てよかった」と楽しんでいただけるような演奏がしたいですね。卒部して以来、倉敷の病院でカルテットの演奏会を山本さんと一緒にしていますが、あと1年間学生の間に僕メロからポップスまで色々な曲を演奏できるようになりたい！楽団では、もちろんハーモニーの中での自主性を大切にしながら自分に与えられた役割を認識してそれをしっかりこなしていきたいです。今日はお忙しい中本当にありがとうございました！充実した6時間でしたね！

山：本当だね！ありがとうございました。

ベートーヴェンの協奏曲チクルスという野望もあります。今後の有森博&保科アカデミーにどうぞご期待下さい。

＜英雄＞ 今回は、ベーレンライター版を使用しています。やや専門的になりますが、弦楽器のスラーの弓の使い方や、2楽章でのノンビブラート奏法の効果にご注目下さい。1楽章クライマックスのトランペットの強奏は譜面どおりです。20世紀後半の、特に大編成のオケではここでトランペットに完全なメロディーを演奏させることができますが、何だか派手すぎるし、かえって安っぽくなるような違和感があります。しかも、なぜ大勝利の後で、2楽章が葬送行進曲となるのか理解に苦します。次のような説明はどうでしょうか。トランペットの不完全なメロディーは、ここで先駆きって突撃する「英雄」が相手の攻撃により落馬するイメージで、それに続く木管の非力な刻みのメロディーは英雄が落馬したあともなお疾走続ける馬だというのです。ちょっとできすぎた話ではありますが、確かにそうすれば次に続く葬送の音楽もリーズナブルですよね。

＜追悼＞ 保科先生の大学時代の同級生で、無二の親友でありました作曲家兼田敏（かねだ びん）先生が、本年5月肺癌のため永眠されました。6月には保科先生を実行委員長とする追悼演奏会が岐阜で開催されました。6年前の保科先生指揮によりますビデオ撮影での当団の演奏を非常に高く評価して下さったのが、兼田先生です。「とっても口が悪い」とお聞きしています兼田先生に、過分にお褒め頂いたことを私達は非常に誇りに思っています。保科先生には、今後も兼田先生の分まで元気に長生きして頂きたいと切望しています。

実はもう一つ悲しい知らせが…。7月20日、岡山大学交響楽団トランペット奏者・齊藤洋介君が急逝されました。まだ2回生でした。現役諸君、そして何よりご家族の胸中は察するに余りあります。英雄の2楽章は、兼田先生と齊藤君への哀悼をこめて謹んで演奏したいと思います。

＜パンフ＞ 毎回素晴らしいエッセイを寄稿して頂いている西欣也氏を少しご紹介します。宮崎県ご出身で、岡山大学文学部に進まれ、オケではチェロを担当されました。部長としても大活躍でした。京都大学大学院文学研究科（美学美術史学専修）に進まれ、その後イギリスに1年間留学され、現在は奈良県在住です。奥さんはオケの同級生のクラリネット奏者です。個人的なことですが、実は私達夫婦がお二人の頼まれ仲人を致しました。年は3つしか違わないし、当時私もまだ院生でしたし、頼む方がどうかしてますよねえ。そのお返しといつてはなんですが、こうして毎回原稿を寄稿しなさい（いえ、して下さい）とお願いして楽しんでいる次第です。

有田氏は我々の大先輩です。イタリアご赴任中、保科先生ご夫妻と、秋山の家族でお邪魔いたしました。フィレンツェ郊外の美しいシエナの街の広場でエスプレッソを飲みながら、コーヒーにまつわる楽しいお話を伺いました。現役時代以来、ラッパに関してはもちろん、大学オケのあり方、そしてアマチュアオケのあり方についていろいろと教えて頂いております。

我々の演奏会パンフは非常に文字数が多く、読み応え（？）があると思います。「芸術を鑑賞するためには知識や言葉は不要ない」あるいは「解説が必要な曲は不完全な作品だ」という意見も承知しています。しかし、知識や情報をふまえて鑑賞する方が、より楽しめる場合もあります。じっくりとお読み頂けたらと思います。そのためもあって、演奏中もあまり客席が暗くならないように配慮しております。

***** 『棒振りのひとりごと』

秋山 隆（あきやまたかし）

＜木村病院＞ 私の恩師で現在の上司である岡田茂教授と、木村院長は高校・大学の同級生です。私が病理の大学院生となったり時に、木村病院をご紹介頂き、以来医学のみならず様々なことを教えて頂いております。（ちなみに現在は、ヴァイオリン・林峰栄氏も時々日当直をされておられます。）今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

＜有森氏＞ あれは2000年の3月末のことでした。岡山市ジュニアオーケストラが姉妹都市縁組の関係で、カリifornia州サンノゼ市に演奏旅行にやって来たのは…。当時サンノゼから車で北へ1時間強のパークレーに留学していた私は、ジュニアオケOBとしても、岡山市民としても非常に楽しみにして家族で演奏会場に駆けつけました。有森氏がソリストとして帯同されていることなど思いもしなかった私にとって、そこで氏に再会でき、氏の演奏するベートーヴェンの『皇帝』が聴けたのはまさに僥倖がありました。岡山市民であることを誇りに思ったのは言うまでもありません。そしてそこで今回の演奏会のプロットが決定されたのでした。今回は私の好みで第1番をお願いしましたが、次は彼の希望でショスタコーヴィッチの第1番をやろうということになっています。